



ぼっかいどう学新聞

創刊号
2020 春号

コロナ後の北海道のために

～ 今こそ、北海道愛を育てよう～

特定非営利活動法人 ぼっかいどう学推進フォーラム 理事長 ^{しんぼ} 新保 ^{もとやす} 元康

わたしたちの国、いえ、世界中が新型コロナウイルスに翻弄されています。4月22日現在、新型コロナウイルスの感染者数は世界全体で約250万人。お亡くなりになった方は17万人を超えたとされています。

これまで「B.C.」と言えば紀元前のことでしたが、これからは、「B.C.」＝「Before Corona(コロナ以前)」、「A.D.」は「A.C.」＝「After Corona(コロナ後)」と認識は変わるのかもしれない。

この危機の中で「ニューズレター」ぼっかいどう学新聞」を創刊させていただくことになりました。わたしたちの北海道愛を「A.C.」にもつなげるべく、会員のみなさんとともに考えていきたいと願っております。

困難な時ほど大切なのは原点に立ち返ることと言います。今回はわたしのぼっかいどう学の原点からお話をさせていただきます。

「雪」からはじまる

平成10年(1998年)に告示された学習指導要領から、「総合的な学習」が始まりました。この学習に教科書はありません。授業作りが大いに悩んだのですが、意を決して「雪」にねらいを定め調べはじめると、これが実に面白う。

北海道人の1年の半分は雪とともにあります。当然、すべてが雪とともに暮らすことを前提に作られている。しかし、その具体はほとんど学ばれていなかったのです。全国標準の教科書にはほ

んのわずかに触れられているだけでした。
例えば札幌市は、年間累積降雪量は約6m。「どこもこんなものなのだろう」と思っていました。ところが、大間違い。そこに約200万人が生活しているの



人手不足のなか、懸命に行われる国道除雪によって、人とモノの動きが保たれている
写真提供＝(一社)北海道開発技術センター

は、この地球上で唯一の都市だったのです。そして、ひとたび雪が降れば、我々が眠っている間におよそ5,400kmもの除雪が行われ、安全な朝の通勤通学が確保されている。この5,400kmは、札幌市と石垣島の往復の距離だと知ったときは、本当に驚きました。さらに、北海道には9万kmを超える道路があります。その全てが、どんな悪天候のなかでも見守られ維持されている。だからこそわたしたちは日々の生活を送ることができ。この「当たり前」の凄みに目を開かされました。

わが北海道の冬の魅力と恩恵に気づいたのもこの雪の学習を通してでした。冬山、流水などはもちろんですが、全てが白に覆われる日々の生活の美しさ！さらにはこの冬のあるおかげで美味しい食べもの恵みがある。我が北海道はなんと豊かな大地であることか！こうして、わたしの北海道愛は深まっていったのです。

北海道のことを もっと学びたい

誰しも自分のことを過不足なく知ることは難しいことです。また、日本人の心のあり



TOPICS

「ほっかいどう学連続セミナー」開催される

「ほっかいどう学連続セミナー」は北海道の多様な魅力とそれを支える人々の奮闘を再発見することを目的として、道内各地区で開催を予定しているもので、当法人の中核的な活動の一つに位置付けられている。本号では、第1回空知、第2回オホーツクセミナーについて報告する。

第1回 空知の魅力再発見

～世界につながる空知の魅力とそれを支えるもの～

令和2年1月25日(土)岩見沢市にて約120名の参加者を迎え、連続セミナー「第1回空知の魅力再発見～世界につながる空知の魅力とそれを支えるもの～」が開催された。当日は来賓に石塚宗司氏(国土交通省北海道開発局開発監理部次長、当時)、竹林亨氏(北海道教育庁空知教育局長、当時)を迎え、空知の魅力をテーマとした4つのセッションとパネルディスカッションの2部構成で進められた。セッションでは、平野義文氏(岩見沢市議会議員・北海道「炭鉄港」市町村議員連盟会長)より、明治期の日本の近代化を牽引した空知炭鉄港の役割と歴史的価値が紹介された。続いて、山崎太地氏(有限会社山崎ワイナリー栽培責任者・空知シーニックバイウェイ体感未来道副代表)より、空知の風土を活かしたワインづくりの魅力と新しい産業としての可能性が提言された。北室かず子氏(ノンフィクションライター)からは、世界に誇れる石狩川の治水事業に取り組んだ明治期の技術者、岡崎文吉の偉業と空知のインフラの魅力が貴重な資料とともに紹介された。佐々木克典氏(国土交通省北海道開発局札幌開発建設部特定道路事業対策官、当時)からは、泥炭地域における道路開発の歴史とそれを支えた土木技術が紹介された。続くパネルディスカッションは「まだまだ眠る空知の宝 子どもに教えたのはこれだ」をテーマに、セッション登壇者に加え間嶋勉氏(長沼町教育委員会教育長)を迎えて進められた。参加者(小学校教員)からは「今日の講演はどれも授業にしてみたいと思った」という声が上がると、ほっかいどう学の重要性を参加者と共有することができた。一方で、教員の忙しさや教材化の難しさなど、教育現場の課題も報告され、地域と学校、行政をつなぐ当法人の役割が改めて確認される機会となった。



第2回 オホーツクの魅力再発見

～世界につながるオホーツクの魅力とそれを支えるもの～

令和2年2月22日(土)網走市にて約100名の参加者を迎え、連続セミナー「第2回オホーツクの魅力再発見～世界につながるオホーツクの魅力とそれを支えるもの～」が開催された。当日は来賓に谷村昌史氏(国土交通省北海道局参事官)、伊賀治康氏(北海道教育庁オホーツク教育局長)を迎え、オホーツクの魅力をテーマとした4つのセッションとパネルディスカッションの2部構成で進められた。セッションでは、田口桂氏(オホーツク流水館代表取締役社長)より、景観、自然、海洋資源の3つの観点から世界的にも希少なオホーツクの流水の魅力が紹介された。富永雄一氏(農事組合法人網走農場)からは、GPSを活用した最新の農業生産現場や今後の展望が示された。佐伯浩氏(一般社団法人寒地港湾技術研究センター代表理事)からは、サロマ湖周辺の養殖漁業の歴史的経緯とともに流水による漁業被害等を克服する防氷堤技術「アイスブーム」が紹介された。高橋一浩氏(国土交通省北海道開発局網走開発建設部次長)からは、網走湖



サロマ湖の防氷堤技術「アイスブーム」
写真提供=国土交通省北海道開発局網走開発建設部

特有の汽水環境に基づく種々の水質改善対策について網走川大曲堰等の具体例を交えて紹介された。続くパネルディスカッションは「まだまだ眠るオホーツクの宝 子どもに教えたのはこれだ」をテーマに、セッション登壇者に加え山田浩氏(湧別町立湧別小学校校長)を迎えて進められた。参加者(教育関係者)からは、「当たり前すぎて気が付いていなかった地元の魅力を再発見できた」という声上がり、オホーツクの自然、産業の魅力と、それらを支える技術を参加者と共有することができた。また、ディスカッションを通じて、オホーツクの魅力を未来に継承する上での教育、地域、行政各々の課題が示され、業種・業界の垣根を超えた連携のあり方を模索する機会となった。

詳しくは、ほっかいどう学ホームページ(<https://hokkaidogaku.org>)をご覧ください。

ようは、よく言えば控えめ、時には自虐的となってしまうことが多いように思います。「北海道は広くて寒いだけだべ」「歴史もないもんね…」
本日は、都府県にして14個分もある豊かで広大な大地であり、ずっと昔からアイヌの人々が自然と共生し活発な交易を繰り返してきた歴史ある大地だということを誇るべきなのではないでしょうか。
37年間、学校教育に携わった実感として、子どもたちは北海道のことを本当に知らないと思います。
「大人になれば分かるだろう」というのは、あまりにも樂觀的すぎるかもしれません。世界は常に競い合っています。自らの魅力を大声で語る人々、ネットで拡散する人々で溢れているのです。私たち大人の目もうつかりするとそちらの誘惑に負けてしまっているのではないのでしょうか。
われわれ大人も、十分に北海道を知っているとは言えないのです。子どもたちの北海道愛を育てていくには、大人がまず学び、意図的な取り組みを継続することが欠かせません。
教育を考えると、忘れてはいけないことがあります。それ

は、見えるものだけに目を奪われないということです。どのような魅力にも苦難にも、その裏側にあるものを見抜き考えることが大切ではないでしょうか。「愛」とは一時の熱情だけではなく、静かな深きものでもあるのです。
北海道の今は、自動的にできあがったものではありません。山川を治め、港を築き、道を通し、ハードソフト両面のインフラを整備して今の北海道があります。北海道の暮らしは、先人の営々たる奮闘の果てに得られたものですし、そのメンテナンスは一時も忘れることのできないものです。そのことに小さなうちから少しづつ気づかせ、Z世代に北海道を支え創る人材を育てて行くのはわたしたち大人の責務と語りべきでしょう。
4月12日の北海道新聞は、コロナ後もニセコに続く投資について報じていました。大恐慌になるのではないかと、この巷の恐怖感とは裏腹に、世界の資本は北海道をじっと見つめているのかもしれない。
海外からのお客様や資本は、今も、これからも、北海道に

コロナ後の北海道を考える

とつて、とても大切なものだと思います。しかし、あるべき共存、共栄の姿とはどんなものなのか、その模索はまだ始まったばかりなのではないでしょうか。わたしたちが気づかない北海道の魅力を道外の方々は実によく知っています。のんびりしてはいられないのです。
今回の新型コロナウイルスによる激震は、これまで大きく進んできた社会のグローバル化を変えていくのかもしれない。コロナ後の社会はまだ霧の中にあります。
しかし、ピンチはチャンスでもあります。チャンスでもありません。わたしたちは今一度立ち止まり、北海道を学び見つめ直すチャンスを得たと考えたいものです。
NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムは、みなさまのご支援をいただき、創立の1

年を終えようとしております。8月の法人登記、10月の設立シンポジウムを皮切りに、空知とオホーツクでほっかいどう学連続セミナーを開催することができました。まちづくりに携わる仲間、教育に携わる仲間、新しいネットワークが生ま

れつつあることを本当にうれしく思います。
北海道の本当の魅力とそれを支えるものを学び続ける旅は、今、始まったばかりです。混沌たる未来を明るく未来へとするために、みなさまと共に前進したいと願っております。



治水のため、「世紀の土木工事」と称される生振捷水路の大工事が行われた石狩川下流域
写真提供=国土交通省北海道開発局

